

明治・大正期中等・高等工業教育機関の建築教育教材に関する研究

—工手学校と東京高等工業学校を中心に—

Architectural Textbooks of Middle and Higher Schools in Meiji and Taisho Era.

-Focusing on the Technicians School and Higher Technological School of Tokyo-

北海道大学大学院工学研究院・助教 池上 重康

（研究計画ないし研究手法の概略）

2018年に東京工業大学博物館において、東京高等工業学校建築科の卒業生の受講ノートと実習課題を閲覧する機会を得た。間もなくして学芸員より蔵前建築研究会『建築参考図集』について問い合わせがあり、調査の結果、東京高等工業学校建築科が編纂したものと判明、同時に先行して刊行された同科編纂の『和様建築製図手本』の存在を知った。その後、同科の教員も執筆していた建築学攻究会編纂『建築学購本』、同科助教授斎藤兵次郎編纂『日本家屋構造』、『日本建築規矩術』など数冊、同科教授前田松韻講述『建築沿革』などの存在を知り、収集に努めた。併せて、東京工業大学博物館では同科教授の滋賀重列と土居松市の旧蔵書の寄贈を受けている。また、2020年には高松市歴史資料館で、工手学校（現工学院大学の前身）で教鞭をとった大島盈株が教科書とすることを目途としたであろう雛形本全冊を閲覧した。本研究では、東京高等工業学校建築科を中心（工手学校建築科は補足的）に、明治・大正期の中等・高等教育機関の建築教育のために編纂された教科書の編纂意図を探るとともに、参考図書として使用された国内外の建築書を特定し、当時の建築教育教材の実像を明らかにすることを目的とする。

基礎となる資料は、建築学攻究会編纂『建築学購本』、斎藤兵次郎編纂『日本家屋構造』ほか数冊、同科編纂『和様建築製図手本』、蔵前建築研究会『建築参考図集』、前田松韻（同科教授）講述『建築沿革』、東工大博物館所蔵の植松軍平（1916年の卒業生）の講義ノートならびに平林金吾（1916年の卒業生）の実習課題と滋賀重列・土居松市（東京高等工業学校教授）の旧蔵書、*Catalogue of European books in the Library of the Higher Technological School of Tokyo*、大島盈株編纂の『日本建築造作集』、『日本建築図譜』ならびに雛形書稿本などである。特に『建築参考図集』掲載の図版は洋書からそのまま引用したものがあるので、その引用元を特定する必要があるだろう。考察対象の期間は1901年の東京高等工業学校の設立（前身の東京職工学校、東京工業学校時代は資料的限界があるため含めない）から、関東大震災罹災の1923年までとする。

（実験調査によって得られた新しい知見）

第1章 東京高等工業学校建築科助教授斎藤兵次郎とその編著書

1. はじめに

明治中期から大正にかけて、東京高等工業学校とその前身学校で日本家屋構造について教授した斎藤兵次郎については、報告は散見される¹ものの、経歴や生没年は不詳である。本章では、斎藤兵次郎の生没年を推定するとともに、東京高等工業学校への奉職とそこでの担当科目、また在職中の執筆活動について考察する。

2. 齋藤兵次郎の生没年ならびに職歴

齋藤が大正8年12月にしたための著書²の諸言で「予が東京高等工業学校に職を奉せしは明治二十八年にして今や満二十五年に達し老齡六十有八年を算す」とあり、年齢を数えて算出すると出生は嘉永3（1852）年となる。また『東京高等工業学校四十年史』からは明治30年度から雇になっている（表1）が、本人はその2年前から奉職したという。前掲書の曾禰達蔵の序には「東京工業学校ノ教員ニ補セラル（中略）当初一二年間ノ卒業者ヲ除クハ一人トシテ君ノ薫陶ヲ受ケサルハナク」とあり、当時、規矩法や日本家屋構造を担当していた今村彌兵衛³の授業補助をしていたと考えられる。東京工業学校に附設工業教員養成所木工科が設置されたのが明治27年であるので、明治28年に奉職したことは曾禰の言と矛盾しない。

齋藤は静岡県平民⁴であり、「規矩準繩ノ家ニ生レ其業ヲ襲ギ是レニ由テ身ヲ起テ」⁵とあるものの、東京工業学校勤務までの職歴は不詳である。前任者の今村が皇居造営事務局にいたことを慮ると、そこで画工などとして働き、今村に請われ、東京工業学校で彼の授業を補助したと推測することもできる。同時期に帝国大学工科大学で規矩を教えていた木子清敬や、工手学校で規矩を教えた大島盈株もまた明治宮殿普請現場にいたので、建築教育で規矩を教える人材として、この現場で働いた人物を採用したとも考えうる。齋藤は大正6年に名を亀吉と改称し、同9年月に職を辞した⁶。同年同月出版の『神社建築構造法』を最後に著書は確認できない。没年是不詳である。

3. 齋藤の担当科目

今村が明治30年3月に没し⁷、同年4月に雇として雇用され、今村の担当科目「家屋構造、製図及意匠、規矩法、木工科実習」をそのまま引き継いだ。工業教員の養成を目的とした木工科では「規矩法ヲ授ケテ造家術ヲ知ラシメ」⁸だが、規矩法の学科目は明治32年に消滅した。明治35年に建築科が設置され「規矩法即チ曲尺遣ハ古来我邦造家工匠ノ秘訣トセシ所ニシテ日本家屋建築上切要欠ク可ラサルモノナレトモ之ヲ学フノ法甚タ難ク職ニ斯業ニ従事スルモノノ遺憾トセシ所ナレハ之ヲ西洋規矩法ト対照シ図法ト実地トニ依リテ授ケ以テ其使用法ニ精通センコトヲ期セリ」⁹と、科目名にないものの、より具体的に規矩の重要性が示されることになった。

明治44年に「製図及意匠」がなくなり、「規矩法」が学科目として復活する。齋藤の退職

表1 東京高等工業学校建築科「日本家屋構造」担当教員一覧

年度	所属	肩書	氏名	担当科目
M27	東京工業学校	工業教員養成所	雇 今村彌兵衛	規矩法、家屋構造、木工科実習
M28		工業教員養成所	雇 今村彌兵衛	規矩法、家屋構造、製図意匠、木工科実習
M29		工業教員養成所	嘱託教員 今村彌兵衛	製図意匠、家屋構造、規矩法、木工科実習
M30		工業教員養成所	雇 今村彌兵衛	家屋構造、製図及意匠、規矩法、木工科実習
M31		工業教員養成所	雇 齋藤兵次郎	同前
M32		工業教員養成所	雇 齋藤兵次郎	家屋構造、製図及意匠、木工科実習
M33		工業教員養成所	雇 齋藤兵次郎	同前
M34		工業教員養成所	雇 齋藤兵次郎	家屋構造、木工科実習
M35		附設工業教員養成所建築科	雇 齋藤兵次郎	家屋構造、製図及意匠、建築科実習
M36		附設工業教員養成所建築科	雇 齋藤兵次郎	同前
M37	東京高等工業学校	附設工業教員養成所建築科	雇 齋藤兵次郎	同前
M38		附設工業教員養成所建築科	雇 齋藤兵次郎	同前
M39		附設工業教員養成所建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
M40		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
M41		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
M42		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
M43		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
M44		建築科	助教授 齋藤兵次郎	日本家屋構造、規矩法、日本建築製図
T1		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
T2		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
T3		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
T4		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
T5		建築科	助教授 齋藤兵次郎	同前
T6		建築科	助教授 齋藤亀吉	同前
T7		建築科	助教授 齋藤亀吉	同前
T8		建築科	助教授 齋藤亀吉	同前
T9		建築科	助教授 佐藤得三郎	同前
T10		建築科	講師 津田信良	日本家屋構造、規矩法
T11		建築科	講師 津田信良	同前

明治27～35年度『東京工業学校一覧』及び明治35～大正12年度『東京高等工業学校一覧』より作成

表2 齋藤兵次郎（亀吉）の編著書一覧

No.	書名	編著者	出版社	出版年月日（初版）	備考
1	日本建築規矩術 上 説明	齋藤兵次郎	信友堂	明治37年3月6日	手島精一序、中村達太郎校閲
2	日本建築規矩術 下 図面	齋藤兵次郎	信友堂	明治37年3月6日	
3	日本家屋構造 上巻 構造篇	齋藤兵次郎	信友堂	明治37年9月25日	滋賀重列序
4	日本家屋構造 上巻 図面	齋藤兵次郎	信友堂	明治37年9月25日	
5	日本家屋構造 中巻 製図篇	齋藤兵次郎	信友堂	明治37年9月25日	
6	日本家屋構造 中巻 図面	齋藤兵次郎	信友堂	明治37年9月25日	
7	日本家屋構造 下巻 参考篇	齋藤兵次郎	信友堂	明治37年9月25日	
8	洋館装飾集	齋藤兵次郎編輯	信友堂	明治38年1月28日	
9	茶室構造篇	齋藤兵次郎編纂	信友堂	明治38年4月27日	
10	日本家屋構造続編間取装飾集	齋藤兵次郎編	信友堂	明治39年12月25日	佐野利器序
11	規矩術統編	齋藤兵次郎	信友堂	明治40年6月18日	
12	日本著名建築写真帖	齋藤兵次郎編	信友堂	明治41年2月9日	
13	和洋建築製図手本	東京高等工業学校建築科編輯	信友堂	明治41年4月1日	
14	大工さしがねづかひ	齋藤兵次郎	信友堂	明治41年8月31日	
15	和洋建具設計実例	齋藤兵次郎	信友堂	明治41年12月6日	
16	規矩法	齋藤兵次郎・川邊藤吉講述	大日本工業学会	大正2年（?）	
17	社寺建築	齋藤亀吉講述	大日本工業学会	大正2年（?）	はしがきには齋藤兵次郎
18	茶室と築庭	齋藤亀吉講述	大日本工業学会	大正2年（?）	文頭には齋藤兵次郎
19	破風造構造法	齋藤亀吉	信友堂	大正7年2月8日	
20	床棚書院 全	齋藤亀吉	信友堂	大正7年5月18日	
21	神社建築構造法	齋藤亀吉	信友堂	大正9年3月5日	曾禰達蔵・前田松韻序

後は、齋藤の教え子である佐藤（後に加藤）得三郎、津田信良が後を継いだ。

4. 齋藤の編著書

管見で21冊の編著書を確認できた。最初の著書である『日本建築規矩術』は、齋藤の諸言に「余ガ多年ノ経験ヲ基礎トシ広ク諸書ヲ参考シ従来ノ曲尺遣ヒニ西洋規矩法ヲ対照シ之等ニ多少幾何学的ノ説明ヲ附シ」とあるように、従来の規矩に加え、「西洋小屋」としてキングポストラス、ドーム、螺旋階段の描き方を示す。同年出版の『日本家屋構造』は全5巻からなり、木造建築の構造を記述した技術書の嚆矢とされる¹⁰。滋賀重列は序文で「本邦由来日本家屋構造ニ関スル書乏シ偶々之ヲアルモノハ多クハ規矩ノ方法ヲ列記スルニミニシテ千篇一律更ニ改善進歩ノ跡ヲ認メズ」と規矩書の現況を批判し、この書を「構造ヲ研究シツゝ製図ヲ学ビ得ルノ方法ヲ採ラレタリ」と評価している。

これら図書は東京高等工業学校建築科の教科書として用いられると共に、齋藤の教え子たちが奉職した全国の工業学校でも用いられた。これ以降に出版された図書は、敢えて「編」と示すように参考書としてまとめられた図集が多い。例えば『日本家屋構造続編』は、佐野利器は序で「紳士ノ邸宅ヨリ農家ニ至リ間取雑作ノ手法ヲ示ス」と言うが、齋藤の諸言に「其数百数十有余図を集め」とあるように、既刊本の図版を多く転載している¹¹。

大正年間に大日本工業学会から出版された講習録¹²については、次章で論じる。

5. むすび

齋藤は、その編著書を通じて、規矩による日本建築の理解を図で示すだけでなく、初学者でも理解できるよう全文振り仮名付きの文章で解説を加えた。近世以来の秘伝書から近代化に対応した伝統建築を継承する方策を示したのみならず、西洋の屋根同士の取り合い（相貫）をも規矩を以て図示した。規矩による西洋建築の理解を提示した点からも高く評価すべき工匠である。

[第1章注]

1. 柳澤宏江「齋藤兵次郎著『日本家屋構造』にみる建築教育との関係について」（日本建築学会東海支部研究報告書第49号、2011年）、pp. 709-712、拙稿「東京高等工業学校建築科編纂の製図用教科書について」（日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）、2019年）など。また、堀勇良『日本近代建築人名総覧』（中央公論新社、2021年）には「齋藤亀吉」の項で記載されている。
2. 表2のNo. 21

3. 生年は不明であるが、皇居造営事務局で図工を勤めたのち、宮内省内匠寮、九州鉄道会社に勤務した（堀前掲書より）。
4. 『学校一覧』の職員名簿より。
5. 表2のNo. 3の滋賀重列による序。 —
6. 『学制頒布五十年記念 東京高等工業学校四十年史』（大正11年）、p. 89。
7. 注6の文献p. 88の記述では「明治三〇年一二月」とも読めるが、「三」とすべき活字を間違えたと考えるのが妥当であろう。 —
8. 『東京工業学校一覧 従明治三十年 至明治三十一年』、p. 110。
9. 『東京工業学校一覧 従 明治三十五年 至明治三十六年』、p. 42。
10. 片野博、長谷隆、山口圭子「明治、大正、昭和初期における建築技術書の分野別出版状況—我が国における技術書の刊行と建設技術の普及に関する研究 その4—」（日本建築学会九州支部研究報告第41号、2002年）、pp. 25-28。
11. 住宅のスケッチは大半が、Morse, E. S., *Japanese Homes and Their Surroundings*. 1885の図版の模写転載である。
12. 堀口甚吉「我が国における建築講義録の発達について」（日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、1972年）で、出版の経緯が報告されている。

第2章 大日本工業学会出版『建築科講習録』について

1. はじめに

東京高等工業学校教官が主な執筆者となって、大日本工業学会から出版された『建築科講習録』（以下『講習録』と略）については、堀口甚吉による報告¹の他に目立った考察はない。今回、岩手大学（旧岩手県師範学校）と京都工芸繊維大学（旧京都工芸専門学校）の図書館蔵書、ならびに古書店より購求したものより、その概要を把握できた。

2. 出版の経緯

前述、堀口の報告によると、「これは大正2年から発行されたもので、始めは2ヶ年24冊で完結のものであった（中略）大正4年に至り2ヶ年は長期にわたるので、1ヶ年13冊にて完結するものに簡略化された」という。しかし、岩手大学図書館所蔵の合本された『講習録』の東京高等工業学校名誉教授手島精一による巻頭言を精読し、入手・閲覧できた『講習録』の記載内容と比較すると、必ずしもそうではない一面が見えてきた。

「工業講習録の刷新に就いて」と題した手島の巻頭言では、「大日本工業学会は夙に思をこゝに致し、大正二年を以て先づ機械、建築等の工業講習録を発行し（中略）高遠なる専門学科を通俗卑近なる言葉を以て、何人にも理解し易きものたらしめ、以て世の職工徒弟諸君の指導者ともなり、又研究相手ともならしめた」が、社会状況が変化し職工徒弟が十分に時

間を取ることが難しくなったため
「我が補修教育特

表3 大日本工業学会出版『建築科講習録』一覧

No.	科目名	著者(講述)	所属*	頁数
1	建築沿革(西洋及日本)	前田松韻	東京高等工業学校教授・工学士	198
2	日本家屋構造	吉田全三	東京高等工業学校講師(元東京高等工業学校教官)	244
3	西洋家屋構造	土居松市	東京高等工業学校教授・工学士	276
4	規矩法	川邊藤吉	東京市立第二補修夜学校長	140
5	建築製図(西洋及日本)	佐藤得三郎	東京高等工業学校助教授	255
6	建築材料	河津七郎	東京高等工業学校教授・附属職工徒弟学校主事	194
7	材料及構造強弱	橘節男	東京高等工業学校教授	216
8	茶室と築庭	齋藤兵次郎	東京高等工業学校助教授	119
9	社寺建築	齋藤兵次郎	東京高等工業学校助教授	172
10	鉄筋コンクリート構造	土居松市	東京高等工業学校教授・工学士	106**
11	西洋建築沿革	滋賀重列 秋保安治	東京高等工業学校教授・工学士 東京府立職工学校長	180
12	規矩法	齋藤兵次郎 川邊藤吉	東京高等工業学校助教授 東京高等工業学校教官	224

*1-10は岩手県師範学校旧蔵書の記述による。括弧内および11-12は筆者所蔵当該本の表紙の記述による。

**当該本は完結しておらず、製本は106頁目で終わっている。

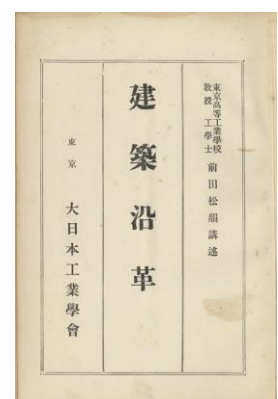


図1 前田松韻講述『建築沿革』表紙

表4 『建築科講習録』講述者一覧

氏名	生没年	学歴	東京高等工業学校での1913年～1916年の職名*
齋藤兵次郎（亀吉）	1852?-1920?	規矩準繩の家に生まれる	建築科助教授
河津七郎	1870-1927	1900年東京高等工業学校附設工業教員養成所建築科	附設工業教員養成所教授、附設職工徒弟学校教授・主事
秋保安治	1872-1942	1896年東京工業学校附設工業教員養成所木工科	〔建築科教授（1918-23年）〕
滋賀重列	1886-1936	1893年イリノイ大学建築学科	建築科教授、附設職工徒弟学校建築科長
前田松韻	1880-1944	1904年東京帝国大学工科大学建築学科	1913年帰国、建築科教授
橘節男	1883-1960	1906年東京高等工業学校附設工業教員養成所建築科	建築科教授・工場長
吉田全三	1880-1976	1908年東京高等工業学校附設工業教員養成所建築科	附設職工徒弟学校助教授
川邊藤吉	?-1920	1908年東京高等工業学校附設工業教員養成所木工速成科	附設職工徒弟学校屋
土居松市	1884-1925	1910年東京帝国大学工科大学建築学科	建築科教授
佐藤（加藤）得三郎	?-1959	1916年東京高等工業学校附設工業教員養成所建築科	附設職工徒弟学校助教授（1916-24年）

堀勇良『日本近代建築人名総覧』（中央公論新社、2021年）ならびに『東京高等工業学校一覧』をもとに作成。

※1917年以降に東京高等工業学校（附設学校含む）に奉職した履歴を〔括弧〕で示した。

に通信教授に於ても、講習の年限が従来二ケ年であつたが、それでは少し長すぎる、できることならば一ケ年位にして、而かも内容その他実質上に於て劣らない方法で、同様な效績を挙げる方法はないか（中略）この要求に応じて起つたものが、今回大日本工業学会の一ケ年修了の新規定に属する機械並に建築科の工業講習録である」と述べている。当初修了年限を2ケ年としたが、毎月1冊ずつ刊行したとの記述はない。例えば、1904年に建築学攻究会が刊行した通信講義録『建築学講本』（6回配本で刊行停止）は、月刊誌の体裁をとり、各号に各科目20頁前後を掲載するものであった。この『講習録』も2年継続の定期刊行物に、一定数の頁を複数科目掲載した可能性は否定できない²。

何年か講習を継続した中で、年限を1年に短縮することを決め、合本出版されたのが岩手大学図書館が所蔵する『講習録』

で、表3に示す、No.1～10の10冊がその科目である。表紙は図1のような体裁で共通しており、この10冊以外に、表紙が同じ体裁のNo.11の『西洋建築沿革』、No.12の『規矩法』の存在を確認している。堀口が「この講義録完結後、単行本となった」数冊³は、図1に示す表紙と体裁が異なる。

3. 『建築科講習録』の出版年

前述、手島の言にあるように、『講習録』は1913年に刊行が開始されたのは間違いないのであろう。表4に講述者とその生没年、学歴、1913年～1916年の東京高等工業学校での職名をまとめた。全員が何らかの形で東京高等工業学校に関与している。しかしながら、佐藤得三郎は1916年に卒業しているので、1913年の講習録発刊時点の執筆者でないことは明らかである。『建築製図』は、他の誰かの講述か、あるいは存在しなかったのかもしれない。

では、刷新された『講習録』はいつ刊行されたのだろうか。手島が名誉教授となるのは1916年で、1918年初頭には没している。齋藤兵次郎は1917年以降齋藤亀吉と改称⁴し、佐藤得三郎は1916年に東京高等工業学校附設職工徒弟学校に奉職することを考え合わせると、この刷新は1916年に行われたと断言できる。

次にそれ以外の2冊について考えたい。滋賀・秋保『西洋建築沿革』は、滋賀の教授在職が1917年までであること、1907年～1917年に東京府立職工学校長を勤めていた秋保が1915年に渡米していることを考え合わせると、1914年以前、即ち『講習録』の刊行開始時のライ

表5 1913年の東京高等工業学校建築科学科目と担当者

科目名	担当教官
材料構造強弱	橘節男
建築用材料	滋賀重列
日本建築沿革	前田松韻
西洋建築沿革	前田松韻
日本家屋構造	齋藤兵次郎
西洋家屋構造	前田松韻、土居松市
特殊建築	滋賀重列
施工法	前田松韻
規矩法	齋藤兵次郎
衛生建築	滋賀重列
日本建築製図	齋藤兵次郎
西洋建築製図	滋賀重列、前田松韻、土居松市、橘節男

『東京高等工業学校一覧 従大正二年至大正三年』より作成

ンナップにあったと考えられる。齋藤・川邊『規矩法』も、川邊が 1914 年以降、東京市立第二工業補修夜学校教員になっていることから、1913 年の『講習録』刊行開始時の一冊であったと推察できる。他にも未発見の『講習録』があるかもしれない。後究に期待したい。

4. 東京高等工業学校建築科学科目との関係

『東京高等工業学校一覧』には、「工業補習学校ノ授業ハ一学年間開講教科目ニ就キ本校教官ヲシテ兼テ担当セシメ又ハ適任者ニ之ヲ嘱託ス」とあり、本校建築科の教官が、附設学校の同一学科目を担当したことが読み取れる。表 5 に本校建築科の 1913 年時点の専門学科目とその担当教官を示した。専任教官である、滋賀、前田、土居、橘、齋藤の 5 名で全科目を分担していることが読み取れる。この担当科目と『講習録』を比較すると、前田の「建築沿革」と橘の「材料構造強弱」以外は一致しない。しかも、1916 年に東京高等工業学校建築科を卒業した植松軍三が遺した前田松韻「建築沿革」の受講ノート⁵と、『講習録』の記述内容は乖離が甚だしい⁶。このことから、『講習録』は、本科の講義録を転用したのではなく、職工徒弟のための通信講義録として新規に書き下ろされたものと判断できる。もっとも執筆陣は、本科教官の薫陶を受けた者ばかりなので、間接的には本科の講義内容が反映されてたと考えることもできよう。

5. むすび

『講習録』の 1913 年刊行時の科目は、1916 年の刷新時とは異なり、本科学科目を準用し、執筆者が本科教官であった可能性を強ち否定できない。滋賀の『西洋建築沿革』、齋藤の『規矩術』がその証左である⁷。つまり、手島の言う「刷新」とは、科目の見直しのみならず、執筆者の大幅な入れ替えも意味したのであろう。『講習録』の対象である職工徒弟を教育していた、河津、吉田、川邊、佐藤が執筆者に選定された所以が、そこにあると考えうる。

[第 2 章注]

1. 堀口甚吉「我が国における建築講義録の発達について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)』、1972 年)。
2. 『建築学購本』において「課外講演」が含まれていたように、筆者所蔵の『茶室と築庭』の巻頭には河津七郎による「科外講義」が同綴されており、定期刊行物であったことを裏付け得る。
3. 例えば、吉田全三『改良日本家屋構造』(1919 年)、土居松市『鉄筋コンクリート家屋構造』(1922 年)などがある。なお、後者は、305 頁で完結している。
4. 拙稿「東京高等工業学校建築科助教授齋藤兵次郎とその編著書」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』、2020 年)。
5. 東京工業大学博物館所蔵。
6. 植松の受講ノートの記述から、前田は Fletcher, *A History of Architecture*. に準拠して講義が進められたことが読み取れる。一方で前田『建築沿革』のうち西洋建築沿革は、Fletcher 前掲書は元より、Fergusson, *A History of Architecture in All Countries*. や Vignola, *The Five Orders of Architecture*. などの図版を転載していることが確認され、これら洋書は東京高等工業学校の 1905 年の洋書目録に掲載される。また、前田『建築沿革』の日本建築沿革は、『特別保護建造物及国宝帖』(1910 年)、木葉会『日本建築細部及文様図集』(1911 年)、木葉会『日本建築図集 上』(1913 年)掲載の図版を適宜転載している。
7. 滋賀・秋保『西洋建築沿革』の巻末に「日本の歴史に関してのみは、次期生徒の為に発行する第二回生の為に逐号講述することとせん」とあり、滋賀が「日本建築沿革」を講述する予定があったこと、講述が連載であったことが読み取れる。

(発 表 論 文)

- ・池上重康、永井康雄、山崎鯛介「大日本工業学会出版『建築科講習録』について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』、2022 年(掲載予定))
- ・池上重康、永井康雄、山崎鯛介「東京高等工業学校建築科助教授齋藤兵次郎とその編著書」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』、2021 年)